

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ一人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

今、差別は刻々減らせる!?

今から書くことは、あまりにもあたり前なこと、と同時に、大変困難なことかもしれない。

その一つは、「無知」は差別する、してしまうということである。20歳の頃、私は部落問題に関して、まったく何も知らない状態であった。小中高校でも、一度も教育によって学んだことはなかった。だが、20代の10年間、夜に被差別部落の子どものたちの学習指導(英・教)に関わるようになったことで、少しずつ部落問題を学んでいった。やがて身に染みて分かってきたのは、自分の無知さ加減だった。無知は、自分の言動が人を傷つけることに気づくことができない。だから、「ごめんなさい」が言えず、さらに相手を傷つけてしまう。

では、次に無知をなくすにはどうすればいいのだろうか。そのためには、まず、部落差別が数百年の歴史の中で、どうやってつくられてきたかを学び、知ることが大切である。それはより知識的な学びにつながる。「知ること」は大切なことだが、逆に知れば差別しないということには必ずしもならないことも事実である。では、「知ること」のうへに何が必要なのであろうか。それは、今の自分の生活の中で、刻々と自分の身

に(自分の生活に)ひきつけて感じ、考える日々の努力である。人は「もし、自分だったら!」と考えることができる。唯一の生きものだから。

被差別部落の子どものたちに関わる中で、自然に数十人の教え子ができた。その中には、勤務地と自分の居住地の双方の差別をなくす運動をふんばり続け、50歳余で倒れてしまった子、結婚差別に遭って、自分の生まれた地区にしばらく住むことも許されなかった子などがいる。結婚して子どもができ、連絡を受けた私はプレゼントを抱えてお祝いにいき、つきたてお餅のようなふわふわの赤ん坊を抱きしめる。その「刻(とき)」が一番部落差別の理不尽さを感じる胸痛い瞬間である。この子が5歳になり、10歳になり、やがて風評や差別にさらされ、結婚差別にあたりすることもあるからである。

差別をなくすためには、自分のこととして考えることが必要だ。学校で行われる人権学習などでも大切なことは、知識の切り売りではなく、「もしあなただったら!」という問いかけが不可欠ではないかと思う。それが、差別を刻々減らしていくことにつながっていくのではないだろうか。

問 教育政策課

見^みつめ直^{なお}そう!
オリ^{オリ}ンピ^{ンピ}ック^{ック}を^を機^き会^{かい}に

2月4日から20日まで、北京で冬季オリンピック・パラリンピックが開催されます。

北京大会は開催される前から世界の注目となっています。それは、中国当局の新疆(しんきょう)ウイグル自治区や香港などでの人権侵害に対する抗議の形として、米国や英国などの国々が、外交使節団の派遣をボイコットしているからです。人権尊重は、国と国との関係を左右する大きな要素となっていくことを改めて実感します。

東京オリンピックでも、関係者による女性差別発言や人の容姿をやゆする発言などがありました。発言させた要因は、私たちの周りにありはしないか、常に自分自身を見つめ直したいと思えます。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは、
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。